

## 関東大震災が与えた近代建築受容への影響—分離派建築会を中心として

IMPACT OF GREAT KANTO EARTHQUAKE ON THE ACCEPTANCE OF MODERN ARCHITECTURE — Focus on the group of Japanese architects ‘Bunriha Kenchikukai’

京都大学大学院工学研究科 准教授 田路 貴浩

### （研究計画ないし研究手法の概略）

本研究は、建築思想史の立場から、分離派建築会メンバーとその周辺による近代建築の受容に、関東大震災が及ぼした影響を調査・分析することをめざした。実際には、分離派建築会発足までの建築論・建築批評の通覧を試みることとなった。とくに当時、『建築雑誌』（建築学会編）とならび、日本で最初の民間建築雑誌として建築界をリードした『建築世界』を対象に論考の収集を行い、第一次大戦後から分離派建築会発足までの建築思潮を解明した。

### （実験調査によって得られた新しい知見）

第一次世界大戦後、言論界全般に「改造」思想やトルストイ思想の建築界への波及により、民衆の生活に依拠した新しい様式の「創造」が求められるようになることが明らかになった。また、分離派建築会メンバーの同級生であった阪東義三が分離派建築会に先んじて、在学中より批評活動を始めており、生の哲学、トルストイ主義、国家社会主義などの新思想に影響された建築論を著していたことなどが明らかになった。

以下、明らかになった主な思潮の概要を示す（『建築世界』の参照箇所は記事題名ののちに号巻と発行年を示す）。

#### 1) 国民的様式の要請

日本は欧州大戦によって国富が増加し、その大部分が資本化して会社、銀行、工場などの建設が盛んとなり、生活の向上に転じて住宅建築が豪奢になった（主張 昨年の建築界, 13(1), 1919. 曾禰達蔵, 戦後の建築, 13(1), 1919）。それとともに西洋の模倣を脱して国民的あるいは民族的建築様式の樹立が叫ばれるようになる。なかでも、「民族的精神の復興」として古代の万葉の精神を民族的精神の原点とする考えが登場したことには注目される。これは明治末から大正初期にかけてアララギ派の歌人たちが万葉集を民族性の理想とした動きに共鳴しているのかもしれない（主張 国民的建築の樹立, 11(2), 1917）。一方、欧米文明の模倣にとどまる自責の念はその後もくり返し表明されている（主張 美的方面を忘るゝな, 13(10), 1919. 山崎静太郎, 新都市の美観に就て, 13(8), 1919）。

#### 2) 議院建築

この頃、国民的様式をめぐる議論は議院建築を中心としていた。1918年9月に募集規程が広告され、1919年2月に第1次募集、同年9月に第2次募集が締め切られた。国民的様式を表現する格好の機会であったが、実際には議論はきわめて慎重で、新しい様式の創造に対する期待よりも、予算の抑制を求める論調さえあらわれた（主張 議院の建築（一）（二）, 11(10-11), 1917）。

結局、宮内省の渡辺福三が一等に選ばれたが、その設計主旨は抑制的で、議院建築は実用以上に民族の向上発展、団結のシンボル、国威を表示するものであるとしながらも、わが国民に適した新様式を創造することは困難なのでギリシア式を主とし、特殊な「創作的」装飾を付加するとしている。「創作」という言葉はこの一箇所にも用いられているにすぎない（渡辺福三、議院建築設計第二次応募図案説明書, 13(11), 1919）。

### 3) 美術の必要性から実用美・構造美へ

構造と美術を対立的に捉えて美術の重要性や美術的建築家の必要性を訴える主張は何度もくり返される（主張 美術的建築家と其教育, 1917, 11(4). 主張 三美術の協力, 11(6), 1917. 主張 大学と建築教育, 11(9), 1917）。しかし欧州大戦は好景気と同時に建築資材の高騰をもたらし、議院建築に限らず、建築全般に対して装飾よりも実用を重要視する風潮を助長することになる（主潮 自覚せる発展, 13(2), 1919）。それに応じて建築家たちも構造と美の両立を迫られ、美術としての建築という思想は、1919年頃から構造美、実用美の建築に移り変わっていく（遠藤於菟、建築の批評眼, 13(1), 1919. 柳澤彰、時代と建築, 13(7), 1919. 柳澤彰、現代と建築（其二）, 13(10), 1919. 主張 建築の実用, 13(9), 1919）。

しかしなお「美術」の重要性を信奉する主張も残存していた。その代表として長野宇平治は、戦争後、人心に著しい変化が生じ、科学的取り扱い方がもはや現代には不十分であって、さらに一段尊い精神的方面の取り扱い方が要求されていることを指摘している。そのうえで、従来の建築家は構造学に深入りし、美術家から遠ざかってきたと批判し、今後は美術的方面に心を向けて世間の要求に応じなければならないと主張している（長野宇平治、美術は主人 科学は召使, 1919, 13(7)）。

構造と美術の調和を説く折衷的見解もあらわれ（主張 美的方面を忘るゝな, 1919, 13(10). 主張 建築界, 14(8), 1920）、構造と美術の二項対立的思考は徐々に力を失っていく。とくに伊東忠太や中村鎮などからも、建築は実用の反映とする冷静な見解も提示され、様式美は建築の主題から後退していった（伊東忠太、余の建築様式観に就て, 14(7), 1920. 中村鎮、西洋建築史講話, 14(2), 1920）。

### 4) ゴシック :

様式がたんなる形式美として否定される一方で、構造美のモデルとしてゴシック建築がしばしば参照されていることは興味深い（主張 大学と建築教育, 11(9), 1917. 遠藤於菟、戦後の建築に就いて, 12(4), 1918. 佐藤功一、高層建築の二種の外観と日本に於ける建築教育の誇り, 13(6), 1919）。F. L. ライトや中村鎮はとくにゴシック建築を高く評価しており（F. L. ライト、日本建築に対する所感 並に帝国ホテルの設計, 11(2), 1917. 中村鎮、西洋建築史講話（其三）, 14(3), 1920）、構造即美という近代建築の原理がゴシック建築を経由してわが国に流入していたことが分かる。

### 5) 社会

1919年の旧都市計画法制定に向かって、都市改良に関する議論が活発化する。1918年4月には建築学会通常大会講演会が開催され、「都市計画」が課題とされた。翌年4月、法案制定の同月に『建築世界』は都市計画号を刊行している。こうした潮流のなか、「構造」と「美術」という二元論に「社会」という新たな視点が加わるようになる（葛野壮一郎、近時建築界に対する二感想, 11(11), 1917. 主張 建築芸術の社会化, 12(5), 1918. 主張 建築家の地位向上策, 12(9), 1918. 阪谷

芳朗,今日の社会問題と建築家の本領,13(7),1919)。なかでも、池田宏はわが国の建築家は図案の巧拙と建築物の美醜とを顧慮するばかりで社会的に自覚していないと痛切な批判を表明している(池田宏,都市計画に就いて,12(6),1918)。

## 6) 民衆と改造

ロシア革命の勃発により、社会問題や社会主義への関心が高まる。議院建築当選案をめぐっても、建築の根柢を「民衆」に求める論調があらわれる(阪東義三,現代思潮から見た当選議院建築,13(12),1919. 主張 思想と建築との合致,14(2),1920)。それらはかならずしも社会主義思想に属するものではなかったが、1919年に労働問題や社会問題を論じた雑誌『改造』が創刊されたことも相まって、「改造」という言葉は大きく広がり、社会のあり方が根底から問い直されることになる。その波は1918年頃から建築界にも及び(石本喜久治,帝大建築学科の現制を論じてそれが根本改造に及ぶ,14(1),1919. 片岡安,我国建築の大改造期は迫れり,12(7),1918. 主張 美的方面を忘るゝな,13(10),1919)、住宅の改良のためには生活そのものを根本的に改造すべきであるという主張が現れる(芹澤英二,斯くあるべき建築,12(10),1918)。

過激化する社会主義思想に対して、共産主義から一線を画し、ナショナリズムを越えたコスモポリタンの立場から世界的様式を訴えるリベラル中道的な「改造」も主張される(城所延由,現代建築スタイルと思想を論じ 世界的建築スタイルの統一を望む,14(4),1920)。一方で、自助共愛の精神をもって各個人の才能を自由に発揮し国家の建築に貢献すべきであるとする、下からの国家社会主義的と呼べる思想も見られる(池田稔,国家と其の建築家,13(6),1919)。

## 7) 創作と自覚

芸術とは個性の自由な発揮であるという通俗的な芸術至上主義と(林博太郎,建築種々観,12(1),1918)、そのような奔放な自由に対する批判が同時にあらわれる。1918年頃から自由な様式=近代式=「創作」という観念が広がりつつあったようである(主張 構造と意匠設計,12(1),1918)。一方で、建築家の社会性が要請されるにつれ、社会や民族さらには人間を自己と結びつけて内面化する動きがあらわれてくる。そこに「創作」が誕生することになる(西野二葉,時代思潮より見たる日本建築の変遷(其八),13(8),1919)。

また、美学的視点からの論評もあらわれ、創作に関する考察が深められていく。鈴木久蔵は、純真な芸術とはある観念の具象的表現として全一な精神的内容を直観の世界に体现したものであり、建築の美的機能は立体的空間官能であるとし、田園ののどかさ、尊厳なる威容、沈静なる潤味などの情趣を空間に表すのが芸術としての建築のねらいであると論じている(鈴木久蔵,独逸建築界史(二),13(8),1919)。また、石本喜久治は、トルストイの人格主義的思想の影響を受けながら、建築は芸術であり、詩であるから、自分の感情、信仰が建築のリズムに現れると主張している(石本喜久治,帝大建築学科の現制を論じてそれが根本改造に及ぶ,14(1),1919)。

トルストイ芸術論は、さらに創作に打ち込む建築家の人格へと関心を導くことになる。今和次郎は後藤慶二の仕事を回顧しつつ、農夫はその収穫のために作物を護るように、建築家は人間が住む、居る、用事する建物を神の心でもって忠実に作ることを本務としていると語っている(今和次郎,芸術と建築,14(2),1920)。また遠藤新について、その作品は生まれ出る芸術創造の衝動本能に駆られて作られる、もっとも美しくもっとも自然な生命の発露であると賞賛を寄せている(伊藤清造,詩と哲学と建築と(遠藤新工学士を論ず),14(8),1920)。

山田守は、建築とは何かという建築実態の研究の必要性を認め、建築観念の向上を訴えた。山田はかならずしも建築の人格主義的深化を語っているわけではないが、建築の本質の探究と建築家の生命の発露があいまって建築の「創作」が可能になることを洞察している（山田守、建築実態の研究に着目して建築観念を向上せしめよ）14(4), 1920)。

## 8) 阪東義三

分離派建築会の同級生であった阪東義三は、東京帝国大学在籍中から『建築世界』にさかんに寄稿している。ニーチェ、トルストイなど当時最新の思想に精通し、才気走った様子が見えがえる。思想的知識は分離派建築会員たちをはるかに凌駕していたようである。

「創造の根源」と題する2回連続の論考では、生命論的世界観が論じられている。それによると、生命は内部自発的に成長し、欲求し、創造する一つの力であり、自己の生体以外の物質をもって物質を支配し、自己を創造する。こうして建築、芸術品、社会的事業、国家的組織が創成される。生命は時間的に縦に持続し私として個性化するだけでなく、空間的に横にも広がり集団を生じる。その時、生命はもはや自分一個のものではなく、「自他一連の渾一体」となる。われわれは真実に自由に生きれば、自ずと建築には国民性が「融和渾一体となって表現」される。このようにニーチェの生の哲学を思わせる思想に始まり、国家社会主義的共同体論に行き着いている（阪東義三、創造の根源, 13(2, 3), 1919)。

続いて、「建築の民衆芸術観」という論考も2回連続で掲載された。そのなかでまず、建築界の状況が自然派、構造派、歴史派に大別される。自然派は、ロダンの主張にもとづき自然が教えるままに構造を定めた結果、外観美と実用的構造とに新しい傾向を生み出したが、アール・ヌーヴォーのように自然に囚われるに至ってしまった。構造派は科学的考察力によって直線、曲線、種々の幾何学的形態を自在に結合し、新しい構造美を現出しようとした。ゼツェッションがその例である。そうして建築の自然派は絵画の印象派に、構造派はカンディンスキー派に類比されることになる。

その後、話題は民衆へと転換する。ここではトルストイ主義に依りながら、特殊個人を捨て去って、人類全体の共有性である「人間性」の価値を尊重しなければならないと主張される。人間性とは「具体的実在的」なものであり、生活から得られる憧憬、苦悶、悲哀などの実感や経験のもとに住む家の「形相と内容」は定められるのである。トルストイが言うように、「生が完成されたところに、初めて真の芸術が生まれる」のであり、それが民衆的建築である。民衆こそ伝習の様式にも自然にも拘泥せず、純粹に人間性と科学的考察力を中心としている。用途と構造に覚醒した分離派芸術は、したがって彼ら民衆によってはじめて一層進化するのであり、そうしていずれは「大正のオットー・ワグナー」が生まれることになるだろう。この点、ドイツ人は模範的な国民といえる。都市の美観は、国または人としての「生の力」から生まれる民衆芸術を咀嚼したものでなければならないが、ドイツ国民は「人間性に触れた意気と精力」を保有しており、「自治行政の根本思潮にたつ民衆芸術的都市計画」は世界に範たるものとなっている（阪東義三、建築の民衆芸術観, 13(8, 9), 1919)。

この論考でも阪東は民衆の生や生活に根ざした建築を訴えつつ、それを国家・国民へと接続しようとしている。国家の様式という明治的課題と民衆という大正的課題が合体する様をここに見てとることもできるだろう。

阪東は大正9年2月1日、東京帝国大学第二学生控所で分離派建築会の習作展が開催されてか

ら1ヶ月後の3月1日、帝大工学部学生、早大理工科、蔵前高工の有志とともに「工業生連盟」を発足させている。欧州大戦後、社会的争闘である労働問題、民族的争闘である「生産工業品の能率問題」が生じていた。阪東によれば、技術者は皇国百年の大計を期し、この苦難を乗り越えるべく改造の使命を負って民族文化の中枢を占め、世界的工業の渦中に入って行くべきであり、そのための有志を募ったのであった（阪東義三, 技術者生活を憂めて先づ工學生聯盟を冀促す, 14(3), 1920）。しかしこの団体の実態はいまだ明らかではない。

以上のように、阪東は生の哲学から民衆へと眼差しを向け、国家社会主義的立場へと進んで行った。分離派建築会のメンバーたちがおしなべて政治的関心を表明していないのとは大きな隔たりがある。唯一、瀧澤真弓が関東大震災と時を同じくして、ゴシック建築への関心から民衆の建築へ目をむけることになる。瀧澤については残された資料が限られているが、関東大震災と近代建築の受容の関係を考えるには鍵となる人物であろう。今後、他の分離派建築会会員、あるいは影響をもたらした思想との関連を調査し、民衆と近代建築の関係を明らかにしていく必要がある。

## （ 発 表 論 文 ）

口頭発表（予定）

- 田路貴浩「建築『創作』の誕生 分離派建築会発足前の建築論」、日本建築学会近畿支部研究報告会、2016年6月25-26日、大阪工業技術専門学校
- 田路貴浩「阪東義三の建築批評—分離派建築会発足前の建築論（2）」、日本建築学会大会（九州）、2016年8月24日-26日、福岡大学